

聖書：創世記4：17～26

説教題：主の名を呼ぶ

日時：2020年1月12日（夕拝）

創世記4章前半で人類最初の殺人事件が生じてしまいました。アダムとエバの子ども、カインとアベルの兄弟の間にそれは起こりました。弟アベルを殺した兄カインの罪がもちろん厳しく問われなければなりません、これは単に彼一人の問題として見るわけには行きません。これはエデンの園におけるアダムとエバの罪が結んだ一つの実として見るべき出来事でした。しかもその罪は両親の時よりもっと強い形で人類に臨んでいることが示されました。どんな罪も神の前でさばかれるべき罪であることに変わりありませんが、アダムとエバが犯した罪は禁じられていた木から取って食べるという罪であったのに対し、カインが犯した罪は兄弟を殺し、死なせるという罪でした。またアダムとエバは神に罪を問われた時、責任転嫁はしたものの、偽りを述べることはしませんでした。カインは堂々と「弟のことは知りません」と偽りを述べ、「私は弟の番人なのでしょうか」と神さえも小馬鹿にするような言葉の使い方をしました。また彼の両親は主のさばきの宣告を黙って聞きましたが、カインは猛抗議しました。そして主からのあわれみ深い約束を取り付けると、さっさと主の前から出て行ったのです。このカインとその子孫はこの後、どんな歩みをたどったのでしょうか。そのことが今日の箇所書かれています。

私たちがそこを読んで思うことは意外や意外、そこに良いこと、神の祝福が色々見られることです。まずカインは妻を通してエノクを得ます。彼は町を建てていたのです。その町に息子の名を付けました。主の守りによって打ち殺されることなく生活を続けていたカインは、自分が作った町にわが子の名を付けたのです。そこから目覚ましい発展また繁栄が導かれて行きます。カインから数えて7代目となるヤバル、ユバル、トバル・カインにおいては人類史上、輝かしい各種文明が開花に至ります。最初のヤバルは、20節にある通り、牧畜業における大革命をもたらしました。それまでも、アベルが羊の初子を主にささげたように家畜を飼う営みはありましたが、ここでヤバルが「家畜を飼う者の先祖となった」という言い方をされているということは、従来より格段に進歩した方法で大規模経営を確立する者となったという意味でしょう。二人目のユバルは芸術分野における先駆者となりました。彼は一つの楽器だけではなく、複数の楽器を製作し、それらを巧みに演奏することによって豊かな音楽文化の創始者となります。三人目のト

バル・カインは鉄鋼業における先駆者と言えます。様々な道具を彼が発明したことにより、日常生活用品から戦いにおける武器、剣に至るまでかなりの革命が起こったものと想像されます。

これらは一言で言えば神の一般恩恵のみわざです。カインは主の前から出て行って、主から離れて生活する者となったからと言って、そこに何一つ良いものは見られないということではなかった。むしろ彼の子孫において様々な分野における素晴らしい発展が見られました。これは人間が神のかたちとして造られていることに基礎を持つことです。罪を犯して墮落したことによって人間は本来持っていた輝きを大きく失いましたが、それでも人間が人間である限り、墮落後もなお神のかたちとしての特性を持っていると聖書は語っています(9章6節参照)。その神を映し出す光がカインの子孫においてもこのように輝きを放ったのです。ですから私たちはどのような人から出た優れた成果でも、それを高く評価し、称賛して良いのです。私たちは実際、多くの一般の人々の優れた発明発見や働きによってたくさんの恩恵にあずかっています。しかし大事なことは、その働きをしてくれた人々に正当に感謝を現しつつも、何よりもその根本におられる神を賛美することを忘れてはならないということです。そして神から出た光を神の栄光のために正しく用いて行くことが大事なことでしょう。

さてカインの子孫の記録には良いものだけがあるのではありませんでした。残念なことは、せっきく光を放っている彼の子孫における文明あるいは文化も、その中心に神がないため、輝きが半減していることです。特にレメクに関する二つの記事に挟まれて一気にその光をかき消されるような雰囲気になっています。まず19節にレメクが「二人の妻を迎えた」と記されています。これは創世記2章で見た一夫一婦制という結婚に関する神のみこころへの明白な反抗です。「男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである」とあったように、結婚は二人の間で、すなわち一人の夫と一人の妻との間で結ばれる人格的な関係です。しかしレメクは二人の妻をめぐりました。一人の夫と二人の妻。これで一体どうやって人格的な一体の関係を持つことが可能でしょうか。レメクは神のみこころを気にもかけず、自分の欲望を満たすために、二人の妻をめぐったのです。彼は神の定めを無視して自分の好き勝手に生きるという傲慢な姿勢を顕わにしたのです。

もう一つは23～24節のレメクの歌です。彼は二人の妻に向かって、このように歌い

ました。まず 23 節：「アダとツィラよ、私の声を聞け。レメクの妻たちよ、私の言うことに耳を傾けよ。私は一人の男を、私が受ける傷のために殺す。一人の子どもを、私が受ける打ち傷のために。」レメクはここで自分が神であるかのような言い方をしています。妻に向かって「私の言うことを聞け！」と言っています。そして自分が傷つけられた場合は、それだけで一人の人を殺すと言います。他人の命の尊さなど少しも頭にありません。さらに 24 節では「カインに七倍の復讐があるなら、レメクには七十七倍」と宣言します。「カインに七倍」というのは、前回 15 節で見た神の言葉を受けたものでしょう。それに対して私は 77 倍を返す！つまり神より私は偉大で強い存在なのだというおごりでしょうか。神以上の力で、私は何でも自分の思う通りにする！そのように宣言して周りを恐怖に陥れ、力づくで屈服させようとする恐ろしい世界が現れたのです。

ここに前回の箇所よりもさらに進んだ罪の力を私たちは見ます。アダムよりもカイン、カインよりもさらにレメク。せっかくの文化文明も、レメクのような人のもとにあるなら、それらはどう用いられてしまうのでしょうか。せっかくの様々な技術の発展も、他者を殺し、自己中心的に世界を支配しようとする者のために使われてしまうのではないのでしょうか。それによって益々住みにくい、未恐ろしい世界が現れるだけではないでしょうか。果たして今日はどうだろうか、大丈夫だろうかと考えさせられます。

しかしこの創世記 4 章を読む者にとっての救いは、これだけで終わりとなっていないことです。最後に二つの短い節が残されています。そこにアダムとエバからもう一人の男の子が生まれたことが記されています。三男セツです。エバは「神が、アベルの代わりに別の子孫を私に授けてくださいました」と言いました。次男アベルが死に、長男カインが去って行った中、あの創世記 3 章 15 節の約束はどのようにして実現するのかと彼ら夫婦は御心を尋ね求めていたことでしょう。その約束を導くため、神はアベルの代わりにセツを与えてくださったのです。

さて、このセツの子孫はどのように歩んででしょう。セツにも男の子が生まれました。彼はその子をエノシュと名付けました。「エノシュ」という言葉は「弱さ」や「もろさ」という意味を持つ言葉だそうです。これはセツが自分を、また人間をどのような存在として見ていたかを指し示しています。そしてこれとセットになっているのは、「そのころ、人々は主の名を呼ぶことを始めた」と記されていることです。先立つカインの家系の記録においては、牧畜業、音楽活動、鉄鋼業の新しい始まりがあったように、こちら

のセツの家系においては神礼拝の新しい始まりがあったということです。おそらくセツはアベルの代わりとしてアダムとエバに育てられる中、両親が苦渋に満ちた表情をしながら、自分の子どもたち、カインとアベルについての話をするのを何度となく聞いたことがあったと思います。その夫婦のもとで生まれ育ったセツは、自分に子どもが与えられた時、これは大変な責任が自分にはあると自覚したのでしょう。これからエノシュを育てて行くためには神に助けをいただかなければならないし、そうでなければ人類に臨んでいる恐ろしい罪の力を食い止め、これに打ち勝つことはできないと考えたのではないのでしょうか。そこで彼は一家を上げていよいよ主により頼むべく、御名を呼び求めることを始めたのです。

以上のように、ここには対照的な二つの流れが記録されています。一つはカインの流れであり、もう一つはアベルの代わりとしてのセツの流れです。私たちはこのどちらの流れに属することを求めるべきでしょうか。カインの子孫には、先に見た通り、輝かしい神の光は認められますし、またそれを正しく認めるべきですが、それは神から離れた文化であり、また人間のエゴイズムと高慢で彩られた文化でした。確かに華々しい発展や繁栄は見られるものの、その行先はどこなのか、その果てはどうなるのか、恐ろしさを覚えずにいられません。それに対してセツの子孫はカインの方と比べると見劣りするのかもしれませんが。自分の子どもにエノシュ、すなわち「弱い」とか「もろい」という名をつけることは、あまりにも人間に対する否定的、悲観的の見方ではないかと批判されるかもしれません。もっと肯定的に、楽観的に、この世界と人間を見るべきではないかと。しかしこの創世記4章は、一見地味なこのセツ系の流れに神の救いの約束は受け継がれているのだし、その流れに加わって生きるようにと私たちを招いているのではないのでしょうか。自らを弱い者と見、主の名を呼んですがる生活は、自らを強い者と豪語するレメクからすれば逃げである！弱々しい者たちの情けない姿である！と評されるかもしれません。しかしこちらにこそ真の祝福と力はあるのです。ヤコブの手紙4章6節：「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える。」ペテロの手紙第一5章6節：「ですから、あなたがたは神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神は、ちょうど良い時に、あなたがたを高く上げてくださいます。」コリント人への手紙第二12章10節：「私が弱い時にこそ、私は強い。私たちは神が様々な人を通して現しておられるすぐれた光を認めて賛美しつつも、セツの呼びかけに従って、いつも主の前にへりくだり、主の名を呼ぶ礼拝の列に加わり続ける者でありたいと思います。そして弱い者を強くし、待ち望む者を高く引き上げてくださる主によって、その方が下さる恵みと救いの

道を進む者たちへ導かれて行きたいと思います。